

読書メモ 2017年3月号

小室直樹著『日本人のためのイスラム原論』

(集英社インターナショナル)のみ

やなぎさわかつひろ

柳沢克央 (上田仮説サークル) 編

2017年3月18日(土), 3月例会用レポート

◇はじめに

先月号の「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校図書室蔵書。

◇読書記録または読書メモ(順不同)

◎小室直樹著『日本人のためのイスラム原論』(集英社インターナショナル・2002年)(私物)

本書の構成は次のとおり。

第一章 イスラムが分かれば、宗教が分かる

第一節 アッラーは「規範」を与えたもうた

第二節 「日本教」に規範なし

第二章 イスラムの「論理」、キリスト教の「病理」

第一節 「一神教」の系譜

第二節 予定説と宿命論

第三節 「殉教」の世界史

第三章 欧米とイスラムーなぜ、かくも対立するのか

第一節 「十字軍コンプレックス」を解剖する

第二節 苦悩する現代イスラム

箇条書きで重要と思われる記述を抜き書き。

はじめに（「まえがき」に相当する）

・イスラム教では宗教とは法である。法とは神との契約である。神との契約は宗教の戒律であり，社会の規範であり，国の法律である。この四つがまったく一致するのが宗教の理想であり，イスラム教はまさにそのとおりである。

・しかるに，キリスト教には法もなければ，規範もまた存在しない。このような宗教において信者が神を信じるには，絶大な努力を要するのである。

・イスラム教とキリスト教とは，同じ一神教であっても天地雲壤の違いがある。

・日本人はアジアの歴史（東洋史），ヨーロッパの歴史（西洋史）は知っていても，中東史すなわちイスラム史を知らない。イスラムこそ 1000 年以上にわたって世界史の中枢であった。その絢爛豪華さは中国すら及ばず，同時代のヨーロッパに至っては，ゲルマン人はいまだ汚い野蛮人であった。大航海時代，ルネッサンスを契機として，ヨーロッパは近代へ向けて発進することになるが，いずれもイスラムの文化的指導がなければあり得なかった。

・世界がイスラムに負うのは，アラビア数字だけではない。代数学，天文学，化学はもとより，ギリシャ，ローマの思想研究もまたアラブを母胎とする。このことを欧米人がすっかり忘れてしまっている忘恩こそが，イスラムと欧米との紛争の原因なのである。

・平等，自由の概念はマホメット以来，当然のこととして知られていた。それなのに，「近代」デモクラシーに限って，なぜ鬼門なのか。

・イスラム世界では近代民族国家がどうしてもできない。これはいったいなぜなのか。

・イスラム教徒が「近代化」しようとする，何もかもめちゃくちゃになってしまう。

・ブッシュ大統領はこんなことを口走ってしまったのではないか。「ビンラディンを捕まえたら，さっそく処刑する」これがどんなに途方もない台詞だということを大多数のアメリカ人は，まだ気付かないのだろうか。…（中略）…アメリカは，中世社会へ逆戻りしつつあるのか。このたびのテロとそれに続くアメリカ出兵の本質は宗教戦争であることを見抜かなければならない。…（中略）…アメリカもまた巨大な宗教国家

であることを知らなければならない。

・キリスト教は元来、異教徒を殺戮することに罪の意識を持たなかった（アメリカ先住民の大虐殺、奴隷の海中投棄、原爆投下などを思い出してもみよ）。一神教徒は、そもそも他宗教を排他する傾向があるが、特に著しいのがキリスト教徒である。

・今回のアメリカとイスラムとの戦いを「文明の衝突」などと呼ぶ向きもあるが、正鵠を射ていない。むしろ「宗教の衝突」、いや、正確に言うならば、「一神教どうしの衝突」と呼ぶべきものである。

・これからの時代は宗教の理解なくして、世界は理解できない。世界を知るカギは、宗教にある。筆者が比較宗教社会学的に分析して『イスラム原論』を著したゆえんは、まさにここにある。

・イスラムを理解すれば、世界が分かる。

第一章 イスラムが分かれば、宗教が分かる

第一節 アッラーは「規範」を与えたもうた

・無宗教病こそ現代日本の宿痼（慢性的な病）に他ならない。

・イスラム教が分かれば宗教が分かる。

・イスラム教は一神教として先行するユダヤ教、キリスト教の中にある不合理性や欠点を徹底的に研究して生まれた宗教なのだから、その教理はじつによく整理されていて、極めて合理的である。

・20世紀を代表する知の人、マックス・ウェーバーは、かつて「学者とは何ぞや」と問われて、言下にこう答えた。「学者に最も大事な能力は、驚く能力である」と。

・学者の学者たるゆえんは、不思議なこと、簡単に説明のつかない事実に出会ったとき、心の底から驚き、それに対して好奇心を持てるか否かにある。

・すべての学問は「驚くこと」から始まる。

・「学者を育てようと思うなら、学問を教えるより驚き方を教えろ」とウェーバー先生は言った。

・なぜ、世界宗教たるイスラム教が日本に定着しなかったのか。これはまさしく驚き以外の何ものでもない。この不思議を探求せずして、何の学者ぞ、何の学問ぞ。

・ところが、日本で出版されているイスラム教の解説書を読んでも、この問題に真正

面から取り組んでいる書物はない。

・この問題に取り組めば、イスラム教とは何かが見えてくる。そして、なぜ日本人が宗教をまったく理解できないのかも分かってくる。さらに言えば、キリスト教や仏教の本質さえ分かってくるのである。その意味において、この問題はまさしくイスラム理解の急所なのである。

・ある人はこう答えた。「アラビア語という壁がありますからねえ」この人が言っているのは、コーランのことである。

・読者の中には、何となくコーランの原著者はマホメットだと思っている人もあるだろう。だが、それは間違いだ。本当の著者はアッラー、すなわち神である。

・コーランを読誦するときには、かならずアラビア語でなければならない。

・翻訳版コーランは参考書程度の扱い…

・イスラム教徒になる以上は、アラビア語は必修…

・要は、コーランをなんとか読誦できれば充分なのである。アラビア語を学ぶといっても、それほどハードルは高くない。だから、「アラビア語が壁になった」というのでは説明にならないのである。

・日本にイスラム教が入ってこなかった責任をイスラム教の側に求めるのは無理というものである。

・これはイスラム教の問題というより、日本人の側の問題なのである。

・いったいイスラム教の教えのどこが、日本人にとって駄目だったのか。その答えを知るには、キリスト教とイスラム教を比較してみるのが一番である。

・共通点の多いキリスト教とイスラム教だが、決定的に違うところが一つある。その答えは、規範（ノルム）の存在である。規範とは、分かりやすく言ってしまえば「これをしろ」「あれをするな」という命令（禁止）である。キリスト教には、この規範がまったく存在しない。これに対してイスラム教は規範だらけ。規範なくしては、イスラム教ではない。この大きな違いにこそ、我々は注目しなくてはならない。

・キリスト教は「無規範宗教」である。規範とは「これをしろ」「あれをするな」という命令（禁止）であるわけだが、この場合、あくまでも人間の外面的行動に限られる。ここが理解のポイントである。

・なぜ規範は外面的行動に限られるのか。外面的行動でなければ、命令を破ったか破らなかったかが測定できないからである。

- ・イスラムの世界では「宗教の法イコール社会の法」である。
- ・「規範の集合」が「イスラム法」である。
- ・キリスト教とは、本来、こうした規範をすべて否定しつくしたところから生まれた宗教なのである。
- ・キリスト教においては外面的行動はいっさい問われない。心の中で神，すなわちキリストを信じてさえいれば，何をやってもかまわない。キリスト教とは「信仰のみ」の宗教なのである。
- ・キリスト教には，およそイスラム教のような規範はどこにもない。
- ・ユダヤ教はイスラム教と同じ規範宗教である。ユダヤ教ではトーラーと「タルムード」の二つが主要な法源である。
- ・キリスト教はイエスが創始したものだが，その教えを完成させたのはパウロである。パウロなくして，今日のキリスト教はありえない。
- ・パウロは律法について，こう断じた。「人が義とされるのは，律法の行いによるのではなく，信仰による」
- ・大切なのは行動なのではなく，心の中にある信仰なのだというわけである。このパウロの宣言によって，キリスト教は律法，すなわち規範と完全に訣別した。つまり，無規範宗教になった。では，いったいなぜ，パウロは律法遵守を全否定したのか。その理論的根拠となったのは何か。それは「原罪」である。
- ・律法を守れないことで，人は自分が原罪を持った存在であることを思い知る。…（中略）…パウロ以前のキリスト教は，ユダヤ教の一分派，異端のように見られていた。しかし，パウロが規範を明確に否定し，原罪をその教えの中心に据えた。このときをもって，キリスト教はユダヤ教と訣別したのである。
- ・信じるだけで救われる — なんとという驚くべき教義であろうか。ユダヤ教，イスラム教を信じるものからすれば，いや，仏教，儒教のような非啓典宗教の民が聞いても，びっくり仰天する話である。日常生活での実践や修行は何にも要らない。
- ・内村鑑三でさえ，それを認めている。「キリスト教の贖罪はまた非常に奇態な教義でありまして，多くの人をつまづかせるものでございます」『宗教座談』
- ・イスラム教ぐらい宗教らしい宗教はない。「宗教のお手本」と言うべきか。
- ・宗教社会学の巨人マックス・ウェーバーはこう述べている。宗教とは何か。それは「エトス」であると。エトスとは日本語に訳せば，行動様式。つまり，行動のパター

ンである。行動の中には意識的なものも、無意識的なものも含まれる。宗教を信じるといふことは、その宗教独特のエトス、行動パターンを持つことに他ならない。

- ・外面に現れた行動様式を見れば、その人がムスリムであるかどうか、ただちに分かる。

- ・イスラム教とは、疑いの余地もなく規範の宗教である。これに対して、キリスト教は無規範の宗教である。

- ・キリスト教は信仰のみの宗教だから、本来、教会は不要なのである。

- ・「なぜイスラム教が、日本には入らなかったのか」という大問題の答えは規範なのである。つまり、日本人とは本来、規範が大嫌いな民族なのである。規範を守るなんて、面倒くさいことこのうえない。日本人は無規範民族なのである。だからこそ、無規範宗教のキリスト教は入ってこられたが、規範だらけのイスラム教は受け付けられなかった。これこそが解答である。

- ・日本人ほど宗教における規範を拒否する民族は、世界中に見あたらない。この事実を自覚し、認めないかぎり、イスラム教を理解するなんて、何千年、何万年かかっても無理な話なのだ。

第二節 「日本教」に規範なし

- ・読者の大多数は、仏教のことを「釈迦の教え」であると考えているだろう。しかし、これは大きな誤解である。では、仏教とはいったい誰の教えなのか。【答え】誰の教えでもない。仏教は思想ではない。それはむしろ、科学に近い。菩提樹の下で、釈迦は「法（ダルマ）」を発見した。法とはすべてを貫く道徳法則である。

- ・「法」があるゆえに、苦は存在するということを釈迦は悟ったのである。したがって、釈迦が発見しようとしまいと「法」は厳然としてそこに存在している。これは、ニュートンと万有引力の法則の関係とまさしく同じである。

- ・仏教においては、まず「法」があり、それを釈迦が発見した。これを一言で表せば、「法前仏後」ということになる。これに対して、イスラム教やキリスト教などの啓典宗教は「神前法後」という構造を持つ。

- ・法前仏後と神前法後——この差はとてつもなく大きい。

- ・仏教における「法」とは法則なのであるから、「守る」だの「守らない」だのなどといった話は最初からナンセンスなのである。

- ・仏教における法は、イスラムの法と違って規範をもたらさない。では、いったい仏教における戒律とは何なのか。結論を先に言ってしまえば、仏教の戒律はイスラム教の規範と違って、守る、守らないは基本的に本人の勝手であって、強制力を持たない。
- ・仏教の法の根底をなしているのは、因果律である。
- ・原因を消滅させ、煩惱を断ち切らない限り、苦は消滅しない。つまり、人間は救済されない。これが釈迦の発見した仏教の^{ようたい}要諦である。
- ・奇妙奇天烈、まか不思議なキリスト教の教義と比べれば、仏教の論理は極めて明晰。その思想は、近代科学に相通じる合理性を有している。
- ・仏教においては僧侶は不可欠の存在である。仏法僧が仏教の「三宝」であって、この三つが揃ってはじめて仏教になる。
- ・ユダヤ教やイスラム教には僧侶は存在しない。至高の神の前に人間は平等なのであるから、僧侶という特権階級は必要ないというのが、この二つの宗教の考え方なのである。
- ・僧侶がいることで、はじめて宗教として成り立つ点で——逆に言うと僧侶なくしては宗教として成り立たない点で、仏教は特異（変わっている）なのである。
- ・仏教の戒律にはイスラム法のような強制力はない。仏教における戒律は徹底的に個人的なものである。
- ・イスラム教やユダヤ教とは違って、仏教の戒律は俗社会とは関係がない。
- ・仏教の戒律は社会から超然としている。
- ・仏教の戒律と、啓典宗教の規範とは、まったく対照的な性格を持っている。
- ・天台宗の僧侶たちは、最澄の戒律全廃思想をさらに推し進め、ついには途方もない理論を完成させた。それを「天台^{ほんがくろん}本覚論」という。その思想はまさに驚倒すべきものがある。その内容を一言でまとめるとすれば「人間は迷ったままでも成仏できる」ということに尽きるであろう。
- ・現在そのまま、つまり煩惱を抱えたままでも悟りを開き、仏になることが可能なのだというのが天台本覚論の要諦である。
- ・天台本覚論は日本の宗教思想の白眉と言ってもよい。
- ・法然や親鸞は「南無阿弥陀仏」と唱名するだけで誰でも成仏できると言った。これはまさしく、天台本覚論を下敷きにした考えに他ならない。
- ・鎌倉時代における親鸞、日蓮らの「仏教革命」だが、その教えが極めてキリスト教

に近似していることに読者はお気づきだろうか。

- ・親鸞も日蓮も、その教説の根底に「末法思想」を置いている。
- ・キリスト教も仏教も、ともに自力救済の可能性を否定している。
- ・儒教は「マニュアル宗教」。マニュアルの体系が孔子の言う「礼」なのである。
- ・儒教は個人の救済をめざすキリスト教やイスラム教、あるいは仏教とは違い、集団救済を目的とする。儒教イデオロギーとは、要するに政治万能主義である。
- ・儒教の目的は、このような理想政治を行える聖人を作り出すことにある。個人個人の救済なんていちいち取り合ってもらえないというのが、儒教なのである。
- ・こうした事実を理解していないと近代の日韓関係の「ねじれ」もよく分からない。
- ・日本人ときたら、儒教の何たるかをちっとも理解できない野蛮人である…韓国の人は今でもそう思っているのである。
- ・元来、外面的行動を厳しく制限する規範を持っていた仏教も儒教も日本に上陸するや、どんどん骨抜きにされてしまった。
- ・やっかいな部分はポイと捨て去って、おいしくて柔らかいぶぶんだけをつまみ食いするのが、日本人の基本メンタリティなのである。こうした日本人の宗教感覚のことを「日本教」という言葉で表したのが故・山本七平氏であった。まさに卓見と言うべきであろう。
- ・まるで、何でも呑み込む鯨の胃袋の如しである。
- ・人間に合わせて規範が変わる。これぞ「日本教のエトス」なり。これが日本人なのである。
- ・キリスト教の教理と神道の思想とは水と油ほどまではいかなくても、なかなかよく混ざり合うことができない。相性が悪いのである。
- ・仏教が（日本で）普及できたのは、ひとえに神道のおかげである。
- ・戒律の廃止と本地垂迹説ほんじすいじゃくせつの導入が両輪になったからこそ、日本では仏教が大成功を収めることができたのである。本地垂迹説とは「釈迦もまた実体ではなく、宇宙の真理が人間の形で現れただけのことである」「日本古来の神様もまた、すべて諸仏が姿形を変えて日本に現れたものである」という思想である。

第二章 イスラムの「論理」、キリスト教の「病理」

第一節 「一神教」の系譜

- ・近代資本主義も近代デモクラシーも、キリスト教という異常な宗教があったからこそ生まれた。キリスト教の精神なくしては、近代の社会は生まれなかったのである。
- ・アガペー（神や隣人への無償の愛）をあらゆる規範の最上位に置いたことこそがイエスの一大独創であった。
- ・カナンの地で行われた侵略と大虐殺。これはすべて神の計画と援助のもとに行われた。このことは何を意味するのか。その答えは明々白々である。すなわち、「異教徒の虐殺は正義なり」ということだ。
- ・隣人とはあくまでも同信の人間に限る。神を信じない異教徒は、もはや人間ではない。その実例は旧約聖書の中に示されている。
- ・ヨシュアとその軍団がやってきたことを「伝説」として片付けたらイスラエル建国の大義まで否定することになる。
- ・イスラエルとパレスチナの間に横たわる溝は、日本人の想像を絶するほどに根深い。…（中略）…何しろ話は紀元前に遡るのだから、そう簡単には解決するわけもないのである。
- ・唯一神信仰というのは異常なものである。そのことを喝破したのが、かのマックス・ウェーバーだ。ウェーバーは旧約聖書や関連する文書を徹底的に研究していかにして古代イスラエルの民が唯一神というアイデアに達したかを明らかにし、それを『古代ユダヤ教』（岩波文庫）という大部の著書にまとめた。この『古代ユダヤ教』こそ、旧約聖書を読む場合の最高の解説書であり、いまだにこれを凌ぐ書物は現れていない。そう著者に証言してくれたのは、関根政雄氏だった。
- ・古代イスラエル人の「発見」した唯一絶対の神とは、いかなる神か。模範解答の一つは「苦難をも、もたらす神」である。
- ・心優しい神から、理不尽な神へ。この「逆転の発想」なくして一神教は生まれなかったというのが、ウェーバー大先生あつての大発見なのである。
- ・「お父さん、火と薪の用意はあるのに、捧げものの子羊はどこにいるの？」「神御自身が燔祭ほんさいの子羊を用意なさるのだろうよ」
- ・神は最も信仰深い人にさえ、苦しみをもたらす。その人を試すのである。
- ・ヨブに対して神がなさしめたのはまさに不幸の連続。模範的な信者でありながら、なぜ神はこのような災いを与えたのか。その理由が理解できるかどうかは聖書理解の

分かれ目であると言ってもよい。

- ・ヨブ記は因果応報の考え方を徹底的に否定する。全能の神がそうと決めたから、苦しみや災いが来るだけのこと。神は因果律に縛られない。神は万能であって、いかなる決断を下すこともできるし、いかなる悪をなすこともできる。

- ・神がなしたもうたことは、どんなに理不尽であろうと「神の御業^{みわざ}」として黙って受け容れなければならない。これこそが、ヨブ記の伝えたかったことである。

- ・古代イスラエルの人たちにとっては、苦難こそが彼らの日常であった。

- ・イスラエルの人々は自らの苦難に意味を与え、民族的アイデンティティを強化することに成功したのである。その確信は彼らが苦勞すればするほど強固になっていった。こうしてついに生まれてきたのがユダヤ教というわけである。

- ・キリスト教で信じられている神のイメージは、ユダヤ教の信じる神と全く変わらない。

- ・イエスの言う「神の国」とは天国のことではない。この地上に突如として現れる、神が支配する神聖なる国家である。

- ・最後の審判に不合格になれば、神様は人間に永遠の死を与える。そうならないためには、イエスの教えを聞いて悔い改めなければならない。

- ・イエスにおいても神は「滅ぼす者」であって、けっして慈悲深い存在ではないのだ。

- ・アッラーは「全知全能」であり、どこにでもおられ、天地とその間にあるすべてのものを作り、支配している。

「慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において…」(コーランの冒頭) イスラム教の神は、ユダヤ教やキリスト教の神とは大違い。けっして怒りにまかせて人類を滅亡させたり、あるいは信者を試したりするようなことはない。その慈悲は海よりも深く、山よりも高い。

- ・旧約聖書を読んでいるだけでは、なぜ歴代のイスラエルの民があれだけ瀆神的なことを行いつづけておりながら、神が彼らを滅ぼさなかったかの説明ができないが、「慈悲深く、慈愛あまねきアッラー」だと思えば、すべて合理的に説明がつくのである。

- ・こと教理の整合性、合理性に関しては、イスラム教は他の二宗教に比べて一段も二段も上である。

- ・一神教において悪魔は本来、無用の存在なのである。

- ・イスラム教の悪魔とは、本来、天使であったものが何らかの罪によって神に罰せら

れた結果、生まれたものだとされる。

- ・「宗教に強制なし」と、コーランに謳ってある。慈悲深いアッラーは、異教徒に対しても慈悲を垂れるのである。
- ・コプト教を救ったのは、他ならぬ、異教徒にも寛容なイスラム教なのである。
- ・要するに十字軍とは、宗教に名を借りた「ならず者集団」だったと理解したほうが、ずっと実態に近いのである。
- ・歴史上、イスラム教が他宗教を弾圧したり、あるいは改宗を迫ったことはない。
- ・イスラム教はキリスト教などと比べものにならないほど、平和的宗教なのである。

第二節 予定説と宿命論

- ・カール・ユング（スイスの精神分析学者）は、聖書に現れたヤハウエの言行を精神分析し、『ヨブへの手紙』という本を書いた。
- ・シナイにおける、ヤハウエによる「ホロコースト未遂事件」。これを読み解くことが、古代イスラエル人の抱いた信仰の特殊性を知るための好個の手がかりとなる。一つはヤハウエは人格神であるという事実。もう一つの手がかりは、モーセは神に対して、徹底的に合理的な対応をしたということ。すなわち、言葉でもって神に語りかけた。生け贄を捧げたり、あるいは呪文を唱えたりするといった非合理的な対応をしなかった。この合理性こそが、古代イスラエルの宗教をして特徴づけるものであるとしたのが、かのマックス・ウェーバーであった。
- ・数ある宗教の中で、なぜマックス・ウェーバーが古代イスラエルの宗教に注目したかと言えば、その圧倒的な影響力である。
- ・この一神教は西においては強大なキリスト教文明を作り出し、また東においては広大なイスラム文化圏を成立させたのである。仏教も儒教も、この影響力の大きさの前にはさすがに影が薄くなるというものではないか。
- ・西アジアの「賤民」たるイスラエル人が世界史を完全に変えてしまった。その理由は何か。他の宗教と古代イスラエルの宗教の決定的な違いはどこにあるのか。それを徹底的に追究した結論として、マックス・ウェーバーが提示した答えが「宗教の合理化」なのである。
- ・一神教という信仰形態は何も古代イスラエルの独創ではない。その証拠に、古代エジプトでも一時期、「唯一絶対の神」を信じた時代があった。エジプト第十八王朝のア

テン信仰がそれである。

- ・そもそも一神教というのは、いきなり出てくるものではない。最初は多神教であったのが、一つの神様が特別に尊崇されるようになり、それと同時に、他の神様が整理されていくという形で作られていく。

- ・古代イスラエル人は単に「苦難をも与える人格神」という独特な神を崇拝しただけでなく、その信仰を合理化という砥石で磨き上げた。この二つの要素が、がっちり組み合わさったからこそ、彼らの宗教は世界中を変える力を持つに至ったというのが、ウェーバーの洞察なのである。

- ・宗教の合理化とは何か。それは具体的には「呪術からの脱却」という形で現れた。

- ・「まっとうな宗教」は呪術を嫌う。

- ・神に願い事をする事自体、本来、許されざる非合理的な行動である。人間が神に願い事をして神が聞き入れたらどうなるか。それは結果として人間が神を操っていることに等しい。

- ・合理化の結果、イスラエルの宗教では呪術を操る魔術師や神官の必要もなくなった。代わりに現れたのが「預言者」である。

- ・マホメットは「コーランこそが最大の奇跡である」と言った。

- ・『コーラン』には特殊な文体上の技巧が非常に上手に使用されている。

- ・コーランはそもそも声に出して朗読されてこそ、本当の美しさが発揮できる。

- ・そしてその美しさは異教徒にも充分伝わるものなのである。

- ・人間には自由意志は存在しない。この思想が産み出したのが、キリスト教独特の「予定説」という考え方である。

- ・重要にして理解困難な教説が予定説なのである。

- ・「信じようと信じまいと、救われる人間は救われるし、救われない人間は救われない」

- ・「誰が神を信じ、誰が神を信じないか」もまた、神が決定する。よって、神を信じる人（クリスチャン）はあらかじめ救済が決定しており、そうでない人（異教徒）は救済されないことが最初から決まっているのである。

- ・もし、善行をすることができたとしたら、それは神が導いて下さったからに他ならない。諸君が今、キリスト教を信じているのも、みな神様のお計らいなのだ…。これこそが予定説の教えなのである。

- ・ウェーバーはその著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において

カルヴァン派の原点回帰運動に注目した。それまでの通説ではヨーロッパに近代資本主義が生まれたのは「キリスト教離れ」のおかげであると説明されていた。彼は「事実はその逆で、宗教改革によって世の中が徹底的にキリスト教的になったからこそ、ヨーロッパは近代の扉を開けることができた」と主張した。このウェーバーの見解、逆説的な理論は、「宗教の合理化」というキーワードを入れるとすんなり理解できる。カルヴァンたちがやったのは、中世のキリスト教から呪術的要素を徹底的に追放することであった。つまり、彼らはキリスト教に合理性を取り戻したのである。そして、この合理性の追求がそのまま資本主義の精神へとつながっていく。なぜなら、近代資本主義は合理的経営なくしては成り立たない。そして、その合理精神の源泉となったのは他ならぬ聖書であったというわけなのだ。古代パレスチナの荒野に育った合理的宗教は長い時を経て、ついに近代資本主義を作り出したのである。

・じつは中世のクリスチャンたちは、ほとんどと言っていいほど聖書を読んでいなかった。

・当時のキリスト教の神学者たちは、異教のサラセン諸国に留学しては、聖書の読解やギリシャ哲学をムスリムの学者から学んでいたわけである。つまり、キリスト教会にとっては、イスラム圏は大事な恩師なのである。こんにちのキリスト教神学があるのは、まさにイスラムのおかげであると言ってよい。その恩師を十字軍で襲うのだから、ほんとうにキリスト教徒というのは因業な連中だ。

・イスラム教は予定説と因果律を同時に抱え込むことになった。この複雑な浅学的状況をマックス・ウェーバーは次のように表現している。「イスラム教の場合は、宿命論的な予定説であり、したがって地上の生活の運命には関係があっても、来世での救いには何ら関係するところがない」(大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 176 ペ)

・この世の運命、すなわち人間の宿命(天命)に関しては、すべて神が決定なさる。だが、来世の運命に関しては因果律が成り立つ。つまり、この世でイスラムの規範を守り、善行を行っていけば、救済される。逆に、不信心で罪深い人生を送っていたら、救済されることはない。つまり、この世と来世に予定説と因果律を振り分けるというのがイスラム教の出した結論であった。

第三節 「殉教」の世界史

- ・イスラムの歴史はテロや暗殺の歴史でもある。
- ・そのような思想は何もイスラムの専売特許ではない。じつはもう一つ、似たような思想を持つ文化がある。それは中国である。
- ・【質問】テロや暗殺を行った人間は、余人をもって代え難い、稀有の人物であるといった趣旨の文章を書き残し、暗殺者を讃えた歴史上の人物と言えど誰でしょうか。正解は中国の司馬遷である。彼はその著『史記』の中にわざわざ暗殺者を讃えるための章を設けているのである。その名を「刺客列伝」と言う。
- ・古来、中国では刺客は尊敬の対象であった。一種のヒーローである。犯罪者、異常者扱いされるアメリカの暗殺者とは天と地ほどの違いだ。
- ・「ここに掲げた刺客は、ある者はそれに成功し、ある者は成功しなかった。しかし、いずれも一度、心に決めたことを守り通した。彼らの名は後世に残った。彼らの行為は決して無意味ではなかったのだ」司馬遷が二人の丞相の間に「刺客列伝」を置いた理由は、まさにここに言い尽くされている。
- ・なぜこのような、欧米人から見れば「クレイジーな暗殺」に中国人は感動するのか。この理由を解き明かしていけば、おのずからイスラムにおける暗殺やテロの位置も理解できる。イスラム理解の補助線として、「刺客列伝」の読解は極めて重要なのである。
- ・いったいなぜ、見ず知らずとっていい嚴遂の頼みを^{じょうせい}聶政は聞く気になったのか。
- ・もしここで嚴遂のために死ぬことができれば、自分の名は永遠に語り継がれるであろう。その確信が彼の中にあっただからこそ、聶政はあえて刺客になったのである。
- ・「士は己を知る者の為に死す」、嚴遂の聶政に対する態度も、まさに国士に対するそれであった。聶政の貧しい家に上がっても、嚴遂は決して礼を忘れなかったし、また聶政の母に対しても礼を尽くした。さらに、聶政からけんもほろろの対応をされても、それでも怒らなかった。つまり嚴遂は彼を国士として扱ったわけだ。
- ・「豹は死して皮を留め、人は死して名を留む」(『新五代史』「王彦章伝」)、中国人は自分の名前を歴史に刻むために死ぬ。
- ・聶政が求めていたのは単なる名声ではない。彼が欲していたのは歴史の中で永遠に語り継がれていくことだった。男子たるもの、かく生きるべし。中国人にとっての歴史とは、かくも重い存在なのである。
- ・まさにこの感覚は、宗教に通じるものがある。

- ・中国における刺客とは、言うなれば「歴史教」の殉教者であったというわけだ。
- ・中国人は歴史を「普遍的なもの」、そして「不変のもの」と考える。一方のヨーロッパ人は歴史を「変転するもの」と考える。
- ・古をもって鏡となす—歴史を学べば、そこに興亡盛衰の法則を知ることができる。よって歴史を学ぶことが政治家としての務めである。
- ・過去に起こったことは現代でも起きる。また、未来においても繰り返される。だから、現在を知り、未来を予測するには歴史ほど役に立つものはない。これが中国人の歴史観なのである。
- ・ヨーロッパ人は「歴史は発展し、変転するもの」と考える。その代表例は、かのカール・マルクスである。
- ・こうしたヨーロッパ人の歴史観を産み出したものは何か。そこで登場するのが、古代イスラエル人の宗教である。パレスチナの「賤民」たちの宗教は、単に近代資本主義を産んだだけではない。その思想は歴史観においても、ヨーロッパ人に決定的な影響を与えたのである。
- ・ユダヤ教においては、救済はある日、神から突然与えられる。神はこの世の秩序を一転させ、そこにユダヤ人を主人とする世界を作り出すであろう。
- ・もし、神がユダヤ人を世界の主人公としたら、それまでの歴史法則はどうなるか。紙くずみたいに丸められ、ゴミ箱に捨てられてしまうに違いない。
- ・新しい時代には、新しい時代の法則があるのだ。
- ・古代ユダヤ人は中国人と同じく歴史を尊重する。
- ・神から与えられた苦難の歴史を記すことは、将来の救済を記すことに他ならないからだ。
- ・このユダヤ人の歴史観が発展して生まれてきたのが、ヨーロッパの革命思想である。
- ・神による救済を固く信じ、神の国の到来を確信しているクリスチャンから見れば、この世はすべて「かりそめ」のことにすぎない。
- ・最後の審判を待たずに社会秩序をひっくり返し、新たな時代を作ったところで、何の問題があるだろう。
- ・かくして、ヨーロッパ人は革命を肯定する思想を抱いた。彼らにとって革命とは千である。進歩である。秩序を破壊し、歴史法則を変更することは神の国に一步近づくことに他ならない。

- ・ヨーロッパにおけるレヴォリューションは、前代との断絶を意味する。
- ・なぜ、中国で王朝の交代が起きるのか。それは体制変革のためではない。それとは逆に、正しい秩序を維持するためにこそ革命は必要であるとされる。
- ・こうした中国の歴史を研究して、びっくり仰天したのが哲学者ヘーゲルであった。
- ・中国では革命で旧王朝が倒れても、その後には「同型（アイソモーフィック）」の王朝が成立し、旧とかわらぬ政治を行っているヘーゲルは見た。そこでヘーゲルが中国を「持続の帝国（アイン・ライヒ・デル・ダウエル）」と命名したのは有名な話である。
- ・直線的に進歩するヨーロッパの歴史。永遠に変わらぬ中国の歴史。この歴史観の違いが、暗殺者に対する評価を 180 度違うものにした。
- ・暗殺者、聶政たちの生き方は中国人をして感動せしめる。ところが、その感動を欧米人たちは本質的に理解できない。
- ・ところが、その「刺客列伝」に共感を覚えることができる人たちが中国人の他にもいるのである。その人たちとは、他ならぬムスリムだ。
- ・なぜなら、イスラムの歴史観もまた中国と本質的に同じだからである。すなわち、イスラム社会においても変化は排すべきものであり、過去からの連続性をこそ重視する。過去の延長線上に現在があり、未来もあるというわけである。たしかに、イスラム教はキリスト教と同じく「最後の審判」の到来を説く。最後の審判来たりせば、アッラーは緑園（天国）か地獄に人々を送りたまう。そこで待っている生活は、現世とはまったく違う原理に基づく。となれば、キリスト教と同様、レヴォリューションの思想が生まれてきそうなもの。ところが、イスラム教からは絶対にユダヤ教やキリスト教と同じ歴史観は生まれてこないのである。それはなぜか。その理由は、マホメットが「最後の預言者」とされることと強く結びついている。
- ・イスラム教ではユダヤ教やキリスト教と違って、新しい預言者の出現を許さない。したがって、神が与えし啓典もコーランをもって打ち留めとする。このことがイスラムの歴史観を決定づけた。
- ・すべてはコーランの定めたままに動くのが正しい在り方である。こう考えるのがイスラム教の歴史観である。
- ・したがって、イスラム社会にはヨーロッパ流のレヴォリューションは馴染まない。むしろ、中国と同種の革命こそ、イスラムに相応しいのである。

- ・1979年2月に起きたイラン革命やいかに。これはヨーロッパのレヴオリューションであろうか、それとも中国の革命であろうか。答えはもちろん、後者である。
- ・パーレビはコーランをゆがめた。コーランを無視した。これを見たとき、イランのムスリムたちは命を捨ててもかまわないと考えるようになったのである。
- ・イスラムの教えが踏みにじられたとき、ムスリムは命を捨ててもかまわないと考える。その姿はまさに中国の刺客と瓜二つである。それは両者とも「永遠に変わらぬもの」が存在することを信じるからである。刺客においては、それは歴史である。一方のムスリムにおいては、言うまでもなくマホメットの教えであり、コーランである。
- ・「アッラーの路に斃れた人々のことを死人（しびと）などと言ってはならぬ。否、彼らは生きている。ただ汝らにはそれがわからないだけのこと」、アッラーのための戦い、すなわち聖戦（ジハード）で倒れた者は死んだことにはならない。いや、生きているのだ。
- ・イスラム教を守るために死ねば、単に歴史の中で永遠の名を刻むだけではない。その人は緑園で、正真正銘、本物の永遠の生命を与えられるのである。

第三章 欧米とイスラム——なぜ、かくも対立するのか

第一節 「十字軍コンプレックス」を解剖する

- ・イスラム教徒の心にある、クリスチャンに対する反感。その実態を徹底的に検証しないかぎり、今、世界で何が起きているのか、そして、これから何が起ころうとしているのかは分からない。
- ・大多数の日本人が知っている世界史は「世界の歴史」なんてものではない。イスラムの歴史が忘れられている。
- ・マホメットは生前、奇跡を行わなかったが、たしかに彼の教えは世界史に奇跡を起こしたのである。
- ・軍事学の常識からすれば、この時代のアラブ軍のように圧勝に次ぐ圧勝をおさめた軍隊には、勝利を収めるそれなりの理由があるはずである。戦術上の革命、新装備・新兵器の登場、組織の改革などなど。ところが、この「アラブの戦い」に限って、そうした合理的説明を見出した学者はいない。いわゆる実証主義では、アラブの急速な拡大は理解できないのだ。

- ・ヨーロッパへの紙の伝来がいかに画期的か。それでやっとキリスト教も広がったのである。
- ・さて、サラセン帝国がイスラム史における第二のピークとすれば、第三のピークは三大帝国鼎立時代である。これぞイスラム史における最も光輝ある時代と言っても過言ではない。
- ・アッバース朝もオスマン・トルコも、ざっと五世紀は続いた。しかも、その文化的影響力は圧倒的とも言えるものだった。
- ・イスラムの歴史には英雄が目白押しである。この英雄たちとナポレオンが肩を並べたければ、まずモスクワを冬将軍が来る前に征服し、返す刀でドーバー海峡を渡ってイギリス王の首をはねるぐらいのことをして見せなければ、まあ無理というものだ。
- ・ルネッサンス運動が、ヨーロッパ近代につながっていくわけなのだが、ヨーロッパ人が古典復興をできたのも、元を質せば、すべてアラブ人のおかげなのである。アラブ人なかりせば、今ごろプラトンもソクラテスもユークリッドも単に名のみを遺す存在になっていたかもしれない。
- ・ローマ帝国という最大の保護者を失ったギリシャ思想を守ったのが、他ならぬアッバース朝のカリフたちだった。
- ・ルイ 14 世が造らせたベルサイユ宮殿ができたころ、オスマン・トルコの大使か誰かが招かれた。ところが、このムスリム、ベルサイユ宮殿の中を一回り案内されて、最後にこう言ったそうである。「え、たったこれだけ？」…（中略）…フランス人が自慢してやまない、太陽王ことルイ 14 世の栄華も、オスマン・トルコから見れば、新興成金ぐらいにしか見えなかった。オリエントには圧倒的な富と贅沢がある。
- ・ヨーロッパ人にとって、イスラム世界はまさに「恩師」とも呼ぶべき存在なのである。ところが、その大恩師に向かってキリスト教はどんな「お返し」をしたのか。それが十字軍であった。
- ・現代におけるイスラムのヨーロッパに対するイメージは、まさにこの十字軍経験が大きく影響している。イスラム教徒の心中には、十字軍に対する聖戦意識が複合（コンプレックス）として、今なお^{ばんきょ}蟠踞しているのである。
- ・イスラム教徒たちにとってモンゴル人の侵略は、それほどのコンプレックスを遺さなかった。それはなぜか。アラブ世界を滅ぼしたモンゴル人も、イスラムの教えの前にひれ伏したからである。

・たとえ異民族の支配を受けることになろうが、彼らがイスラム教徒になってしまえば、それほど深刻な精神的ダメージを受けないのである。

・ところが、キリスト教徒ときたら…。彼らはさんざんイスラムの世話になっているというのに、イスラム教に教化されなかった。また、十字軍の戦いで敗れても、その信仰を捨てようとしなかった。何という救われない連中であろうか…。これがイスラム教徒の偽らざる感想ではなかったか。

・トルコ軍によるウィーン襲来は、**1529年**と**1683年**の二回、行われているのだが、中でも深刻だったのは後者である。

・急遽、トルコ軍撃退のために前例のない連合軍が編成されることになった。これまでの恩讐を超えて、ポーランドとオーストリアが対トルコ連合を組んだのである。この天下分け目の戦いで活躍したのが、かの有名な三英雄である。ポーランド王国のソビエスキー、オーストリアの名将プリンツ・オイゲン（サボイ公）、ハノーヴァー選帝侯ゲオルグ・ルートヴィヒ（のちの英国王ジョージ一世）。この三人の働きで、ようやくウィーンは死地を脱することに成功したわけだが、もし、このときの戦いにヨーロッパ人が敗れていたら、間違いなく世界史は変わっていたに相違ない。

・歴史も社会科学である以上、思考実験はその知見を深めるうえで、きわめて重要である。もし、思考実験が許されないのであれば、永遠に歴史学は「物好きの学問」で終わってしまうというのが筆者の意見だ。

・もし、ヨーロッパがイスラム世界に組み込まれていたとしたら、現代の地球には近代資本主義もなければ、近代民主主義も起こりえなかった。また、高度に発達した科学文明も、けっして生まれることがなかった。これは断言できる。資本主義も民主主義も、そしてまた近代合理科学もキリスト教徒のヨーロッパ人だけが作り出したものだからである。また、そのためにこそ、プロテスタントによる宗教改革が必要であった。

・恐るべし、近代ヨーロッパ。彼の前にはコーランの教えも、ジハードの戦士たちも敵わない。

・アラブにおける商業の歴史は、世界最長・最古であると言っても、あながち大げさではあるまい。ところが、そのアラブ人をはじめとするイスラム教徒たちが、なぜ一世紀近くもかかりながら、いまだ資本主義を体得できないのか。ここにこそ現代イスラムの苦悩はある。

・筆者はあえて断言する。イスラムにとって、近代化の壁はあまりにも厚く、堅い。それを突破するのは、ほとんど至難の業と言ってもよい。

第二節 苦悩する現代イスラム

・なぜヨーロッパだけが近代資本主義に到達できたか。この謎を探求していくことで、イスラム世界が近代化できない理由も、おのずから明らかになってくるであろう。

・マックス・ウェーバーは近代資本主義の秘密を、次のように喝破した。「近代資本主義の発展は、資本主義に徹底的に反対する経済思想が公然と支配してきたような、そういう地域でなければありえなかった」（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳・訳者解説より）

・資本主義に「徹底的に反対する」経済思想がなければならない。もっと分かりやすく言うならば、金儲け（利潤追求）を全否定する思想がなくては、本物の資本主義は出てこないというのだ。これほど奇妙奇天烈な説があるだろうか！

・「通常の考え方では、まず商業が発達し、そして、その商業やその担い手である商人たちを内面から動かしている営利精神、営利原理といったものが社会の到るところへしだいに浸透していくと、その結果として近代の資本主義が生まれてくるのだ、とされている。しかし、歴史上の事実はけっしてそうになっていない、と彼（ウェーバーのこと）は言っているのです」（同上）まことに、いくら驚倒してもし足りない話ではないか。

・金儲けは絶対に許さない。利潤追求は悪である。こう考える思想が存在した。それは他でもない、キリスト教である。キリスト教は、元来、資本主義に反対する経済思想を公然と掲げていた。商売は魂の救済を妨げる、危険なものである。貪欲こそが人間の大罪である。…（中略）…反商業、反資本主義の思想は、キリスト教を一貫してゆるがない。

・ことにカルヴァン派では、利子禁止は徹底していた。どんな形であれ、利子なんて絶対に認めない。そんなことをすれば救済なんて絶対にありえないとカルヴァンは信者を脅し上げた。ところが、そのプロテスタンティズムこそ近代資本主義を産み出す触媒となった。とくに聖書に厳正なカルヴァン派の存在は大きかった。何たる矛盾！という気がしてくる。

・資本主義はプロテスタンティズムを媒介（触媒）として誕生した。キリスト教が資

本主義に徹底的に反対した宗教であったからこそ、ヨーロッパでは資本主義が生まれることになった。前期的資本は宗教改革を触媒にすることで、近代資本主義における資本（産業資本）へと変貌したのであった。ここが理解の急所である。ポイントである。

- ・熱心なプロテスタントになればなるほど、救いを求めて聖書にすがりつく。イエスの教えに従った生活をしようとする。

- ・救済されるか否かは、まさに神のみぞ知る。だが、救われるほどの人なら、けっして道を踏み外さないはずだというのである。

- ・この思いつめた生活、いや、思いつめきった生活こそが、彼らのエトス（行動様式）を変換せしめた。

- ・「カーライルが《わが英雄時代の最後のもの》と言ったのが誤りでないように、市民階級そのものにとって、ほとんど空前絶後ともいうべき英雄的行動を示した」（ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚訳・191 ペ）ウェーバーをして、特筆せしむるほどのエネルギーがそこにはあったのである。

- ・かくして、宗教改革後のクリスチャンの間には「行動的禁欲によって天職を遂行すれば、救済される」という思想、もっと分かりやすく言うならば「労働こそが救済である」という思想が確立した。この思想こそが「資本主義の精神」の母胎となったというのがウェーバーの指摘なのである。

- ・予定説がもたらしたエトスの変換。その現れの一つが、利潤追求の徹底である。

- ・キリスト教徒であるためには、内面（心の中における信仰）だけでよい。

- ・「信仰のみ！」（ルター）

- ・外面における行動は究極的にはどうでもいいのである。したがって、プロテスタンティズムが徹底し、エトスの変換が起きるとヨーロッパでは利潤の追求が熱心になされるようになった。

- ・適正な利潤を手に入れる。これは貪欲の罪どころではなくて、倫理的に善い行いではないか。いや、端的に、神の聖意にかなう隣人愛の実践ではないか。

- ・ここにおいて、キリスト教は商業や利潤を徹底的に排撃する宗教から 180 度転換し、近代資本主義を擁護し、利潤追求を奨励する思想となった。「資本主義の精神」が発生したのである。

- ・以上はマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

の中で説いたことのエッセンスの、そのまたエッセンスであるわけだが、さて、このウェーバーの観点から見たとき、イスラムに近代化の可能性はあるのか。これは絶望的も絶望的、とことん絶望的と言わざるを得ない。

・イスラムにはそもそも商業活動や利潤の追求そのものを全否定する思想がない。「イスラム法の枠内において」という限定はあるものの、最初から利潤を追求することが許されている。これでは資本主義を産み出すのに不可欠な「エトスの変換」はいつまでたっても起こりようがない。

・ムスリムのエトスは変わりようがないのだから、そこから「資本主義の精神」が出現することなど、金輪際ありえないのである。さらに決定的に重要なことは、イスラム教には予定説がない。同じ一神教でありながら、イスラム教とキリスト教では救済のありようが天地雲壤のごとく違う。

・神との契約を絶対に守らなければならないように、人間同士の契約も絶対に守らなければならない。この観念が発達していたからこそ、ヨーロッパには近代資本主義が成立しえたのである。

・ムスリムたちは約束を破っても平然としている。

・キリスト教社会において「契約の絶対」が生まれた背景には、この隣人愛（アガペー）を忘れるわけにはいかない。愛がタテからヨコに変換された結果、人間同士の関係、つまり契約においてもタテからヨコへの変換が起こった。そして、タテの契約が絶対である以上、ヨコの契約もまた絶対でなければならないという考えが生まれるに至った。この論理こそが急所である。

・アッラーはムスリムとともにあって、彼の行動をすべて監視しているというわけだ。このような信仰においては、タテの契約がヨコの契約になるという余地はない。というのは、そもそも俗界の契約もとどのつまり、すべてタテの契約であって、人間同士の約束なんて成立しようもないからである。

・イスラムの人間はその「ありがとう」は神に言うのである。イスラムの人間にとって、商売を成立させてくれたのは神である。理屈で言うと、売ったほうは商売ができたのだし、買ったほうは欲しいものを手に入れたのである。そうして、両者に喜びを与えてくれたのは神である。だから、お互いに「神にありがとう」と言うのである。

・不測の事態が起こったり、何かミスが起きて、契約を守れない状況が発生したとする。そのとき、欧米人や日本人はトラブルを何としてでも乗り越えて契約を履行しよ

うとするだろう。これがヨコの契約に慣れた人間の感覚。だが、タテの契約に取り巻かれたイスラム教徒はそう思わない。何かトラブルが起きたとき、彼らは反射的に「これはアッラーの思し召しによるもの」と考える。これをアラビア語で「インシャラー」という。

- ・もし、近代化を徹底しようと思えば、イスラム教そのものを捨てるしかない。
- ・これでは十字軍コンプレックスは解消するどころではない。イスラムがクリスチャンに完敗したことになってしまうではないか。この矛盾、この苦悩。
- ・イスラム社会と欧米社会の対立は単なる「文明の衝突」ではない。この対立は 1000 年以上にわたる歴史がもたらしたものであり、その根はあまりにも深い。かりにアメリカが今回の「テロ戦争」において勝利を得たとしても、それはつかの間のものでしかない。そのことを読者の皆さんはよくよく肝に銘じておくべきであろう。
- ・苦悩するイスラム。傲慢たる欧米。この両者が理解しあえるのははたして、いつの日ぞ。(終)

次回以降の予告リスト

- ◎関良基著『赤松小三郎ともう一つの明治維新』（作品社・2016年）（私物）
- ◎森^{ほのお}炎著『裁判所ってどんなところ？』（ちくまプリマー新書・2016年）
- ◎齋藤孝著『新聞力—できる人はこう読んでいる—』（ちくまプリマー新書・2016年）
- ◎ローレンス・A・カニンガム著／長尾慎太郎監修『パフェットからの手紙（第4版）』（Pan Rolling 株式会社）（私物）
- ◎国谷裕子著『キャスターという仕事』（岩波新書・2017年）
- ◎飯野高広著『紳士服を嗜む』（朝日新聞出版・2016年）（私物）
- ◎広瀬^{かずお}和生著『談志の十八番—必聴！名演・名盤ガイド—』（光文社新書・2013年）（私物）
- ◎吉田敏浩著『「日米合同委員会」の研究』（創元社・2016年）（私物）
- ◎古山浩一著『万年筆の達人』（柘出版社・2006年）（私物）
- ◎川島隆太監修・横田^{すすむ}晋務著『やってはいけない脳の習慣』（青春出版社・2016年）
- ◎板橋^{いたばしさとる}悟著『なぜ分数の割り算はひっくり返すのか』（主婦の友社・2016年）
- ◎水島広子著『自己肯定感、持っていますか？』（大和出版・2015年）
- ◎立川志の輔著『落語家』（実業之日本社・1997年）

- ◎井手英策著『18歳からの格差論』(東洋経済新報社・2016年)
- ◎ちくま評伝シリーズ《ポルトレ》『オードリー・ヘップバーン』(筑摩書房・2015年)
- ◎佐渡島庸平・里中満智子他著『人生と勉強に効く学べるマンガ 100冊』(文藝春秋・2016年)
- ◎ちくま評伝シリーズ《ポルトレ》『岡本太郎』(筑摩書房・2014年)
- ◎NHKスペシャル「私たちのこれから」取材班編『超少子化—異次元の処方箋—』(ポプラ新書・2016年)
- ◎川名壮志著『密着・最高裁のしごと—野暮で真摯な事件簿』(岩波新書・2016年)
- ◎瀬木比呂志著『絶望の裁判所』(講談社現代新書・2014年)(私物)
- ◎小山鹿梨子画・フランクリン・コヴィー・ジャパン監修『まんがでわかる7つの習慣』(宝島社・2013年)

◇まとめ・つぶやき

大相撲の小結・御嶽海が強いのは仮説・実験しているかららしい。NHKのローカル番組の御嶽海特集を見て感じた。スポーツ選手がコーチなどの立場にある人のアドバイスを①受け入れる。②聞き流す。その結果として、③うまくいく。④うまくいかない。の組み合わせが4通りあり、その違いがどこから生まれるかがわからないという趣旨のことを前回のメモに書いた。それから、ずっと気になっていたが、この番組を見て結局、「仮説・実験をしているか、していないか」ということで差がつくのではないかと感じた。本人がある問題について「仮説」や「問題意識」を持っていれば、彼(彼女)の選択には必然性が生まれて、「実験」ができ、「問題が解決する」(または「向上する」)、「仮説」や「問題意識」がなければ「実験」にはならないから、いつまでもたってもフラフラで問題は解決しないままになる…ということなのだと思う。

[2017年3月17日(金) 17:05 脱稿]